教祖 130 年祭　エッセイ　「私と教祖」　　敷島大教会台北心勇教会長　森本哲司

・　日々の感謝の思い

私は立教 177 年 2 月 5 日で台湾へ布教に来させていただき 40 年になります。

布教ビザを取得した時、六代大教会長山田忠一様は、私に尋ねられました。「ビザを取得したがどういう心定めでいるのか？」私は、「毎日 12 下りのておどりをさせていただきます。身上者にお授けをお取り次ぎさせていただきます。」と答えました。大教会長様は「日参やで」とお諭しくださいました。私はこれから心勇教会の住み込み布教師として海外布教をしようとしていました。日参？台湾から大教会にどうして日参出来るのだろうかと不思議に思いながら聞かせていただきました。

私は 20 歳の 11 月 14 日未明に二代真柱様の夢を見ました。それは、真夜中に真柱様が「胸が痛い。憩いの家の柏原を呼べ」と仰り、お苦しみのご様子でした。夢だと思っていますと私の胸が痛み出し、痛みは徐々に増して心臓が風船球のようにふくらみ破裂する寸前迄せつなみが襲って参りました。出直しを覚悟し、走馬灯のように過去を振り返りました。思いあたったのは、第４３回天理教青年会総会での真柱様のお話でした。あらきとうりょうの使命はやはり海外布教であるというお話に、私は海外布教をさせていただくと心からお誓いいたしました。たちどころに胸の痛みは治まり、漆黒の闇夜が明るい晴天の世界へと一変いたしました。『みちのとも』紙上に真柱様より 14 日未明胸が痛いという電話が柏原院長にあったことが記載されておりました。真柱様と若い未熟な私が息ひとつに生かされている不思議。誠の心は神が見ている。おやは見抜き見通しで、おやさまは初代真柱様について「芯は弱いが肉の巻きようで太くなる」真柱に真実を寄せる大勢の用木を待ち望ませられるという教祖のご期待を知りました。

みちの遅れを挽回したい、親神様教祖の大恩に報いたい、村内に名称設立をしたいという私の願望に、母トョコは「海外布教が天理女学生以来の私の夢だった。私の夢を継いでほしい。」との会話の直後だったのです。おやの言葉の尊さも不思議さも知りました。

私は、足下から海外布教を始めようと大学に再び通い始め、おぢばに日参し、村にいる身上の少年のおさづけに通いました。伏せ込みの重要性を感じていた時、大教会長様より大教会で青年づとめをせよ。儂がお前を育てようとお声をかけてくださいました。23 歳の誕生日に大教会へ帰らせていただき、青年づとめが始まりました。お与えのお札を小銭に換え、毎日朝夕「図南会」の基金箱にお供えし、真柱様へのお誓いを固めさせていただき、不思議にも心勇教会派遣をいただいたのでした。

２６歳の誕生日を台湾で迎えました。台湾での２ヶ月滞在後、布教ビザの申請取得し、大望の海外布教心勇教会へ参りましたが、言葉も分らず、信者も無く、広い参拝場で一人でつとめる 12 下り。おさづけをさせていただく方を紹介いただき通うと、他系統の信者で巡教の先生より注意をされ手足が萎縮してくるのです。海外布教を誓ってきたのに、前にも進めず、後ろにも戻れない絶体絶命の心境時に、天より降りてきた助けの綱は「日参やで」という以前いただいたおやの声でした。手紙の日参をさせていただこうとふと胸に浮んできました。そして、大教会長様は日参の手紙を胸ポケットに入れ、おぢばで心勇教会の理の栄えをお祈りしてくださいました。

日参の実行より不思議にも日参してくださる信者が一人一人と増え勝り、日々信者と 12 下りのておどり、おさづけのお取り次ぎをさせていただく姿をお与えいただきました。大

教会長様ご夫妻、おあや親奥様の真実で、妻みよと結婚、1990 年 2 月 26 日台北心勇教会の名称設立願いお許し、1994 年 9 月 12 日三代真柱様お入り込み、2007 年 3 月 17 日四代真柱様お入り込みをいただきました。子供達もおぢばの学校でお育ていただき、海外部でお使いいただいております。

七代大教会長山田はる乃様より教祖 130 年祭に向かう三年千日の歩みとして、会長は教会を代表して毎月大教会の月次祭をつとめるようにと、おぢばがえりの声をいただきました。私は、おぢばがえりの喜びから日々の理に 6 座の座りづとめを加えさせていただきました。「教祖百三十年祭に向かって　仕切って歩もうたすけの旬　定めて通ろう成人の道」との大教会長様の思いにそわせていただきたいと台北心勇教会一同一手一つに三年千日を歩ませていただいております。存命のおやさまありがとうございます。